

私は「附属育ち」、良さを知っています

——先生は国大協副会長を務められておりますが、29年6月の総会で附属学校園に関する発言をいただきました。国大協の場で「附属」という言葉がでたのは、附属に関わるものとして感激しました。はじめに、大学が附属学校園を持つ意義、理由をお聞かせください。

国立大学が附属学校や附属幼稚園（以下、まとめて「附属」と言います）を持つことは大きな意義があると思っています。優れた教育法や教育の底に流れる精神といったものは

お茶の水女子大学長
室伏 きみ子

（国立大学協会副会長）



必ずしも現場だけで養えるものではありません。大学と附属が協力してさまざまな研究を行い、それを実践の場に行ってプラットフォームアップすることで、効果的な、なおかつ質の高い教育を創りあげることができると考えています。子ども達の資質・能力を十分に開発する教育を実現する上でも、附属の役割は大きいと思います。

大学との連携で、附属が創出する成果は、公教育の場で十分活用されることを目的とするものであり、日本の子どもたちの学力を高め、思考力や創造力など、多様な力を育む上で、とても役に立つものです。国立大学の附属は不要との意見がありますが、私は、国全体の教育の質を高める上でも国立大学附属学校園の存在価値は高いと思っています。

私は、お茶の水女子大学の中・高校と附属育ちです。さらに大学と修士課程までおりました。当時博士課程がなかったので、外に出ましたが、12年間お茶の水の質の高い、多様性に富んだ教育を受けてきましたので、附属の良さを、身をもって知っております。

——同じく6月の国大協総会で、里見会長（当時）から附属の話ができました。大学の財政状況が厳しいが、附属はぎりぎりの人員で運営しており、これ以上の教職員カットはできないという内容でした。附属のことを思ってくださいの発言だったのですが、一方で、今後さらに厳しい財政状況になった場合は、附属の規模の縮小も想定しているのではと勘ぐってしまいました。附属を抱えることは、運営にとってはマイナス要因なのでしょうか。

とても大きな問題です。今86国立

大学の多くが附属を抱えています。そのなかで、大学の経営状況が悪くなったために、附属を縮小するとか、なくしてしまいう方向を検討している大学も、実はあるのです。本学でも、附属の経営に必要な費用はかなり大きいものですから、維持し、更に発展させるためには相当な工夫が必要で、

切り離れた方が楽ではないかとよく言われるのですが、私たちは、切り離すつもりはありません。本学では、保育園児から大学院生、社会人までの広い年齢層の人たちが同じキャンパスで学んでいます。これは、本学の教育と研究を支える大きな特色です。

人の一生を通じて、小さな子どもから年配の方までが共に学びあえるこの環境は、教育の接続の問題を解決する上で、もともと貴重なものであると言えます。この環境を失うことは、本学の価値を大きく損なうものであり、国にとっても損失です。

一つのキャンパスに多彩な年齢層、附属は大学の財産

人とはどういうものなのかというところを突き詰めてゆく上では、赤ちゃんから年輩の方までがいる環境で、様々な年齢層の人々の生き方を学び、理解することが大切です。幸い一つのキャンパスにいろいろな年齢の人々が学ぶ附属と大学、大学院が揃っていますので、無理なく互いの連携が図れています。さらに言えば、本学には附属として位置つけたナーサリーと、文京区立の認定こども園が同居していて、研究や教育において協力関係にあります。

人が一生を通じて心身ともに健康で幸せに暮らせるための研究を推進し、それを実現するための環境を整えることが本学のミッションのひとつです。その実現のために、附属は本学の財産です。ですから、お茶の水では附属を切り離すことを縮小することは、今は考えておりません。

そして、附属の維持と発展のために、現在、財政的な基盤を確立することに努めております。外部資金の獲得や、同窓生をはじめとし

て多くの方々に「寄附を呼びかけるなど、努力して居ります。

変化が激しい時代ですので、これからの社会がどう変わるかわかりませんが、附属の価値をさらに高め、それを積極的に発信して、社会からの支持を得るために頑張っているところです。

——「国立教育養成大学・学部、大学院 附属学校有識者会議」に関連して数点お伺いします。附属に対する厳しい意見がありました。建設的な指摘がある一方、新聞報道などでは「エリート校」に対する批判など、本質的な議論とはかけ離れたものが目立ちました。附属に対する社会の理解不足からくるものと思われませんが、社会に対するPRのあり方としては、どのようなことができるでしょうか。

私も、PRは足りないと思っております。現実には本学の附属でも、素晴らしい活動を行っており、成果を挙げていますが、それを世の中にかけて頂いていないという事は感じています。とても勿体無いことです。私は初めての附属出身の学長ですので、その立場を活かして「オーロお茶の水」体制を確立しました。そして、すべての附属と大学の連携によって、年齢に応じたカリキュラムを構築し、自主・自律・協働の態度をもつ幼児・児童・生徒の育成手法の開発と実践・検証を行っています。加えて本学の附属では、長年に渡って継続的に文部科学省の研究開発学校等の指定を受け、特色ある研究に取り組んできました。それらの中には、学習指導要領の改訂に影響を与えてきたものも多々ありますので、国の教育政策を強くサポートしてきたと自負しています。このような本学附属の公教育への貢献と存在意義を社会に広く知って頂くために、大学側からさまざまな改革をお願いし、附属の皆様もとても頑張つて下さっています。

エリート校といいますが、本学の附属はいわゆるエリート校ではありません。ただ、人



気のある学校です。応募者はたくさんあります。そのなかから、幼稚園と小学校では学力テストは課しておらず、主に抽選で、多様な幼児・児童を入学させています。中学校は実験校としての教育開発機能を確保するために一定の学力テストを課しています

「育成する人材」を牽引する

が、学習指導要領の範囲内での基本的な問題を出題しています。高校では、一般の公立高校でも学力テストを行っていることから、同様な選抜方法を採用しています。が、中学校同様、学習指導要領の範囲内で問題を作成し、出題しています。難問奇問を解くことを入学基準としているわけではありません。

「教育ではないが、エリート教育」

ただ、本学の附属は、先生方が非常に熱心に、いろいろな研究開発を進めていますので、教育の質はかなり高いと考えられます。「アクティブラーニング」ということが、昨今言われていますが、本学の附属では、既に、昭和50年代から、アクティブラーニングという形での教育を進めています。

さらに幼稚園から小学校への接続や、小学校から中学校への接続、また中学校から高等学校への接続を大事にして、子どもたちが挫折してしまうような各学校間の段差を上手に解消できるよう、教育の方法などについても研究を行い、子どもたちがそれぞれの資質・能力を十分に開花させられるような教育を行っています。

このように、最初から試験に強い子ども達を集めているわけではなく、附属のなかで、子ども達が持っている資質や能力を育成するということが、教員たちが努力していることで、優れた人材が輩出されているのだと思います。実際に、卒業生は、いろいろな領域で活躍しています。つい先日、附属中学校の創立70周年記念行事がありました。そこで様々な職業を持つ卒業生6名によるシンポジウムが行われました。私も「研究者」として参加

したのですが、映画製作者の方ですとか、自然保護の活動をアフリカで行っている方、子ども達のさまざまな課題に向き合う社会活動をしている方、海外と日本で弁護士資格を持つて活躍している方が参加され、そしてアナウンサーの方が司会を務めて、とても楽しいパネルディスカッションが行われました。

本学の附属には、自由な雰囲気の中で、互いに尊重しあって、それぞれが持っている力を伸ばそうという姿勢がありますので、型にはまらない人材が育っていると思います。

これは、いわゆるエリート教育とは違っています。思っています。子ども達の能力を引き出し、将来世の中を牽引できるような人材を育てていることは確かだと思っています。

——これまでの実績のみでは、附属の存続理由として不十分との意見がありました。附属が今後充実発展するためには、どのような取組が必要でしょうか。

国立大学の附属は、本学もそうですが、他の学校も国民全体の教育の底上げを図る研究を推進しています。先ほども申しましたが、本学の附属では文部科学省の研究開発校に指

定され、大学との連携でさまざまな研究開発を行って、新学習指導要領に役立てている実績があります。

ただ、そういった実績が社会に知られていないという現実もあるわけです。ですから「国立大学の附属ってこんなに役に立っています」ということを、いろいろな場面でお知らせしないといけないと思います。

それで最近では、周年行事や講演会、シンポジウムなどを利用して、本学と附属の活動や実績を知って頂けるよう工夫をしています。一昨年は大学の創立140周年記念行事、昨年は幼稚園の140周年行事を執り行いました。今年が附属中学校の70周年で、来年は小学校の140周年です。

周年行事などに、学外のさまざまな方々にご参加頂き、附属における研究と開発が大学との連携の下で推進できていることを知っていただくべく、企画を立てました。さらには、すべての附属と大学が一体となって、小さな子どもたちの教育から大学院教育までの底上げを図り、優れた人材を育てるために努力していることを見ていただきたいし、評価していただきたいと思っています。

附属だからある「大学への責任」

活動内容や実績を、もう少し知っていただくために、研究会や公開授業なども行っています。附属小学校の公開授業は、今も非常に人気があり、2月末に開催されるのですが、日本全国から延べ3000人くらいの先生方がお見えになります。そのほかの附属でも研究授業などがあると、日本中からいろいろな方が訪れて下さいます。参加して下さっている方には、本学附属の試みを分かっていただいていますが、参加されていない方が当然多いわけですので、時間や予算、遠距離などの理由でお出でいただけない方々にも、お知らせしなくてはいけないと思っています。

一般の皆さまに「国立大学の附属は素晴らしい」とおっしゃっていただくのは、とても大変だと思いますが、いろいろな方にわかっ

ていただいて、応援団になつていただけるように頑張っていかななくてはならないと思います。

——附属不要論も聞かれますが、あらためて附属があるべき理由を聞かせてください。

存在理由がいまままでの実績で十分とおっしゃる方がいらつしやるそうですが、それは附属のことを「存知ないからだ」と思っています。附属がどんな教育と研究を行っているのかということをもっとよく分かっていたければ、そう簡単には「存在理由はない」とはおっしゃれないと思います。今、社会で活躍されている方の方々が国立大学附属出身者であることが知られています。お茶の水の附属の出身者にも、素晴らしい方が多いですし、筑波大の附属、学芸大の附属、また、地方の国立大学の附属出身の方で「活躍の方が非常に多いわけです。そういう方々の活躍を見て、「国立大学の附属は役に立っていない」とは言えないと思つのです。社会で活躍していること、社会を牽引していることは、とても大きな社会貢献です。そして、そういった方々を輩出し続けていることは、附属の大きな存在理由です。

また、各国立大学の附属において、公教育のためのさまざまな研究開発を行い、それが役に立っているという例はかなりあると思つています。それらの事実を知っていただければ、国立大学附属への評価が変わってくるだろうと思います。

一方で、不十分だと言われるのは、附属の側にも知ってもらうための努力が足りなかったのだと思いますので、大学と附属とが一緒になって、これから社会に向けて発信していかなくてはいけないと思つています。

最近、附属と大学とが乖離しているという批判を聞きます。そういうふうに感じ

「応援団」獲得へ努力必要

られるところもあるのかも知れませんが、本学の場合は、大学と附属が一体となって開発研究などを進めています。他の大学でも、程度の差はあっても、同様な努力が進められていると思います。

3年前に学長に就任して以来、附属学校部の組織を強化しました。そこで、附属と大学とが一緒にいろいろな事業を行い、大学の教授が附属学校の校長として、研究と教育の両方に責任を持てるような体制を作っています。

附属が「独立している」ことが悪いとは全く思わないのですが、ただ、附属であるからには、大学の運営や経営に対して責任もあると思いますので、互いに協力しあうことが重要だと思っています。

—文部科学省でも有識者会議での議論が行われるなど、教員の働き方改革も進んでいます。公立のモデル校である附属学校では、どのような取組を進めるべきでしょうか。

やはり国立大学の附属はいろいろなモデルを作って社会に提供することが必要です。教員の働き方等に関しても、国立大学の附属でこういうことをやっているというモデルケースを示し、それを役立ててもらうことが大事だと思っています。本学でも今、働き方改革を進めています。先生方はまじめで熱心な先生ほど、長時間勤務をしてしまう傾向があります。それを何とか改善しなくてはいけないので、各附属のそれぞれの事情に即した働き方改革を、附属学校本部会議で進めています。

附属学校本部会議は、学長が本部長で、そのほかに副学長、理事などがメンバーになっており、附属学校の校長、副校長、一部の教員の方々に入っていただいて、研究開発や働き方などの課題について議論をする場となっています。その下に、いくつかの分科会を作つて、そこで先生方が附属全体の問題に横串を差して議論をするという体制を作っているので、働き方改革についても、それぞれの学校園の良いところを取り入れながら、改革が進むと思っています。

有識者会議の「圧力」に負けず良い教育を

クラブ活動や生徒会活動などでも、今までのものを単に踏襲するのではなく、子どもたちの育ちのために必要なものをきつちりと見定めて、できるだけ子どもたちや教員の負担になることはそぎ落としていくような形で改革を進めています。小学校や高校でもクラブ活動やPTA活動についてもメスを入れ始めていますので、もっと教職員が働きやすい、そして子どもたちや保護者にとっても心地良い空間ができるのではないかと思います。

—本日は、ご多忙のなかにもかかわらずお時間をいただき、ありがとうございます。最後に、全国の附属関係者へのメッセージをお願いします。

これまで附属が育て、培ってこられた教育の基盤は大事にしていたきたいと思います。それに基づいて、それぞれの附属が持ついろいろな特色をさらに伸ばして、本来の意味で子どもたちが健やかに生きていく力を身につけられるようなモデルを創出して頂きたいと思えます。そして、社会に向けて教育・研究の成果を発信していただきたいと思っています。

私が存じ上げている国立大学附属の先生方は、みなさん非常に熱心で、子どもたちの成長のために、本当に楽しそうに教育や研究を進めていらつしやいます。勿論外部の方々のご意見に耳を傾けるのはとても大切ですが、必要以上に有識者会議の「圧力」に屈することはないと思います。各大学も、附属と共にがんばろうという姿勢を持っておりますので、大学との連携を密にして、さらには附属同士との繋がりをつくつて、今後全国の子どもの幸せのために、優れた教育・研究を創出し続けていただきたいと思えます。

国大協でも附属の在り方について議論が進んでおり、近いうちに本学のケースをお話させていただくことになっています。何とか良い方向に進むよう、一緒に頑張りましょう。